

民俗資料館だより

第12号 2005. 3. 31

発行 加茂市民俗資料館 電話 0256-52-0089
住所 加茂市大字加茂229-1 FAX 0256-52-0089

地域の宝を伝える民俗資料館

加茂市民俗資料館長 中 滝 孝 明

皆様方には、日頃民俗資料館をご利用いただきまして有り難うございます。

当民俗資料館は、郷土への愛着心の高揚と、先人が培ってきた歴史や文化の資料などを後世に伝えることを目的として開館いたしました。また、自然環境に恵まれた加茂山公園内にあり、見学して頂くには最適の場所に位置しております。

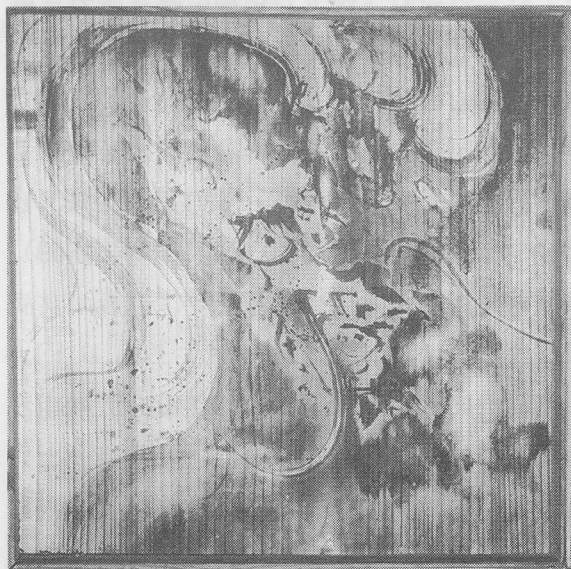
現在全体の収蔵品としては、約20,000点ありますが、そのうち約1,200点を館内に常時展示しております。展示品は、加茂の祭り、歴史、古文書、また市内から出土した石器や土器などから、加茂の産業の歴史に関連した建具の製造工程や木工の特産品、漢方薬の製造器具、加茂縞の機織り機、陣ヶ峰瓦、紙すき用具など、いずれも日常では見る機会のほとんどない貴重な資料ばかりとなっています。

今、加茂市では新しい加茂市史を編さん中ですが、あらたに見出された資料も多数にのぼっております。これら先人の培ってきた歴史や文化の資料という貴重な地域の宝を、次代を担う方々に伝えるためにも、どうか、皆様方におかれましては、今後ともお気軽に当資料館をご利用いただきますようお願い申し上げます。

加 茂 の 文 化 財 紹 介

上条 長瀬神社境内 住吉神社
格天井画 探山筆

下条 稲荷神社 社務所
格天井画 田中文珪筆



寛政改革と越後縁女の北関東・奥羽縁付け

加茂市文化財調査審議会委員 佐藤 賢次

18世紀末の北関東や奥羽の農村は、重い年貢と飢饉で潰れ百姓が続出し、耕作放棄された荒れ田畑や空き家が目につく荒廃した村へと変貌していった。村の荒廃は人口減少をもたらし、享保6年(1721)を100とすると、天明6年(1786)の東北地方の人口比は8割、常陸(茨城県)・下野(栃木県)は7割にも落ち込んでいた。これらの地域では貧しさから「口べらし」のため、捨て子や出生児の「おし返し」(堕胎)が頻繁し、特に女兒が「間引き」され、年を経ると村に適齢期の女性がいなく、すさんだ村に博打と犯罪がはびこった。

天明7年(1787)、老中松平定信(陸奥白河藩主)が取り組んだ寛政改革は、こうした荒廃農村の立て直しを図った改革であったが、その政策の一つに、北関東や奥羽へ人口がだぶついていた越後から農民(百姓の二、三男、ないし無高農民)や適齢期の女性を姫として送り込む「縁付け」策が採られたことはよく知られている。越後の農民は貧しかったが、雪国の生活から忍耐強く、また浄土真宗の門徒が多いため殺生戒の教えがゆきわたり、辛くても間引きを忌避する風土であったから、こうした村の立て直しの姫として好まれたのである。加茂にもこの時の縁付け史料が若干残っており、幕府水原代官所の取り組みの一端を窺い知ることができるので、ここで紹介し、若干の考察を試みてみよう。

越後から奥羽や北関東へ娘を縁付けさせることはいつの時代にも見られるが、仕法を立て、政策として始めたのは、白河(福島県白河市)藩が最初とみられる。当時、定信の白河藩は柏崎に役所を置き、三嶋・蒲原に8万石の領地を持っていた。東北地方を襲った天明飢饉でも越後領からいち早く米を取り寄せ、被害を最小限に食い止めたという実績もあった。白河藩が越後から縁女を呼び寄せる政策は、天明5年(1785)、岩瀬郡鏡沼村(鏡沼町)の大庄屋常松次郎右衛門が、越後から娘を引き取り、姫不足の村に分配するという仕法を献策し、藩が積極的に推進することになったためという。常松が見るところ、越後では貧しい農民が間引きする風習は少ない代わりに、子供を飯盛女や遊女に売る、人身売買が盛んな地域だけに、白河は越後から遠いが、12、3歳位の女兒を金2両から2両2分くらいの「祝金」を親に渡せば引き取ることができるを見た。この仕法は白河藩の柏崎役所付けの村々を通じて、主に三嶋・蒲原から募集し、寛政元年(1789)から始められた。第1回募集の寛政元年4月に15人、秋に14人の合計29人(白河領から14人、村上領から9人、村松領から3人、幕領・高崎領・新発田領から各1人ずつ)の応募があった。白河への縁付け策は寛政年間(1789～1800)いっぱい、春と秋の年2回ずつ、凡そ年間3、40人くらいが引き取られていったという。文化6年(1809)、白河を旅した江戸の山片幡桃がその旅行記に「白河から伊達の大木戸に至るまで、越後の女満々なる」と記し、娘を買得して分配することを「古今の良策」と評している。

白河藩の縁付け策が推進され始めたころ、幕府水原代官所も奥羽幕領への移住策を取り組み始める。上条村庄屋の中沢太郎兵衛が水原代官所の動向を新発田藩に知らせた「内密書」という史料によると、水原代官の大貫治右衛門は、寛政2年秋の廻村のとき、三条町(村上領)にわざわざ立ち寄り、本寺小路の玉屋戸七という口入人と密かに会い、奥羽移住の希望者を集め

るよう頼んだこと、その際、この計画は主に私領の農民から募るよう指示したこと、翌3年2月までに三条から長岡辺で5、60世帯も集めたということが記されている（上条 中澤家文書）。

さらに「内密書」によれば、寛政3年に入ると役所の取り組みも本格化し、春から手代の市川藤蔵が塚目や矢代田などに泊まり、村役人たちに内密で私領の農民を募るよう指示して廻っていること、加茂には2月18日に水原役所詰めの赤谷新田庄屋の理右衛門が帰村し、夜にもかかわらず、庄屋たちを急ぎ集め、趣旨の説明があったこと、その折り、この話し合いの内容は加茂町元庄屋の明田川徳次郎の耳に入れないよう申し合わせたことが記されている。徳次郎は2年前の上知の時、新発田藩領に残りたいと願い、幕領となった加茂町庄屋を辞退し、新発田藩から新発田領加茂組庄屋に取立ててもらったほど、新発田藩に入れ込んだ人だから、徳次郎の耳に入ると面倒になることを懸念したものであろう。水原役所は、奥羽移住農民の15歳から60歳までの稼働年齢者には金1両2分の家作費と、農具・鍋釜代の金1両を与え、さらに移住後の翌年8月に刈り入れができるまでの一家夫喰米と種子粉を与える、としている。

寛政3年2月には、新発田藩も領内から奥羽新領（2万石上知の代わりに与えられた陸奥国信夫ら三郡）が「人少なで空き屋敷が多く、田畑所持の者も無妻」の者が多いとし、越後の領内から奥羽行きの娘と農民（年季小作人）を募集すると達した（「御触書・申渡書留帳」新発田図書館所蔵）。応募する娘には先方に嫁入りする手当て金（祝金）を、農民には1カ年に2両1分から2両2、3分くらいの給金を与えるとしている。女や奉公人の世話は、信夫郡嶋田村（福島県猪苗代町）の名主清右衛門が世話をし、嫁入り先や小作先を配分するとしている。

同3年、関東では関東郡代伊奈忠尊が失脚し、その跡地に定信の推す改革派代官が進出し、北関東の代官支配は新たな段階に入るが、常陸（茨城県）・下野（栃木県）の5万石を支配した篠山十兵衛代官は、水原代官の大貫治右衛門と同様に、江戸馬喰町の旧郡代屋敷で執務する郡代付代官の一人で、村の復興のため、積極的に女奉公人（奉公の名目で嫁入り）の招致を図った。このため、篠山と志をともにする大貫は、代官所の方針を北関東への縁女の募集に重点を移していった。

加茂の市川浩一郎氏集蔵文書に、寛政4年2月に加茂町庄屋の明田川仁次右衛門が書き記した「女奉公人一件留帳」という史料が残っている。これによると、寛政3年11月までに上条村や加茂町など幕領から12人、三日市領南館村（新発田市）から5人、村上領燕町など4人、高崎領太田村（燕市）の2人など、合計52人の応募があり、うち27人は農業奉公に適さない、あまりに小娘すぎる、親類から反対の意見があるなどで断ったこと、23人のうち15人は常陸河内・真壁郡に、8人は下野芳賀郡に配属することが記されている。

越後から北関東や奥羽へ娘や農民たちを送り込む政策は、文化年間（1804～17）頃まで継続した。寛政4年には長岡領漆山村（西蒲原郡巻町）の田辺家の世話で本成寺（三条市）檀徒の庄内（山形県）移住、頸城郡の真宗門徒の常陸・下野への集団移住もあった。

民俗資料館

平成16年度の歩み

1. 入館者数

平成16年 4月

〃

平成17年 3月

	市 内	市 外	計	団体
大 人	2 1 2	5 8 7	7 9 9	5
小中学生	4 7 3	1 7 4	6 4 7	1 5
計	6 8 5	7 6 1	1, 4 4 6	2 0

2. 資料収集の状況

本年度は6名の方から46件231点のご寄贈賜り御礼申し上げ、紹介させていただきます。

〈寄贈・寄託品名〉

- 考古資料（土器、石器類）
- 36ミリフィルム（大正時代）
- 道中合羽
- 刺し子半纏
- 古書（天保～昭和）
- 矢立
- 七谷和紙雨合羽
- 七谷和紙材

〈寄贈者ご芳名（敬称略）〉

- 加茂農林高校
- 古川信三
- 伊藤景昭
- 坂井勝夫
- 名古屋 清
- 船喜テント

3. レファレンス・サービス及びアンケート調査（民俗資料館への問い合わせ）

① レファレンス・サービス（44件）

- 「加茂市の道路元標について」
- 「五反田橋付近の古地図が見たい」
- 「長福寺の山新田部落の歴史について」
- 「お登り峠の所在と現状について」
- 「加茂稿の歴史について」
- 「加茂における戊辰戦争の資料の要望」
- 「加茂市が小京都と言われているのは何故か」
- その他

② アンケート・調査（13件）

- 平成15年度博物館園活動報告調査について（財一日本博物館協会）
- 16年度企画展、特別展に関する情報収集について（日本歴史学会）
- 台風、地震、大雨の被害報告依頼（新潟県教育庁文化行政課）
- 文化財保護功労者の調査について（県文化財保護連盟）
- その他

4. 博物館実習生の受け入れ

- 8月9日～17日 東京成徳大学 小出和代
- 9月13日～22日 高知大学 塚野由紀
- 〃 新潟大学 中山みどり
- 〃 〃 坂井昭彦
- 10月25日～
- 11月1日 新潟大学 坂井友紀



実 習 風 景

5. 館 外 活 動

① 古文書講座

初めて参加者にアンケートを取らせていただきました。皆さん、楽しみにしておいでいただいていることが心強く思いました。 受講者延べ 187名

○ 日 時 9月7日 9月14日 9月21日 9月28日 10月5日

各火曜日 午後7時～午後8時30分

○ 会 場 加茂市民体育館内 公民館 第1研修室

○ 講 師 加茂市文化財調査審議委員

溝口敏麿 関 正平 佐藤賢次 長谷川昭一 丸山朝雄 各氏

○ 内 容 共通テーマ『江戸時代の加茂の暮らし』

第1回「明治2年の加茂町」御用留 溝口 敏麿 氏

- 廻章 居之隊加茂町初一今日より毎月3と8のつく日に上条地内陣ヶ峰において教練をおこなう。その日、雨天の場合には追って連絡をするのでそのつもりでいるように。(晴れがましい文章)
- 「急」廻章—予定日が雨のため、15か村に急いで連絡せよ。右の廻章を早急に廻送して返しなさい。(文章を書き終わった後に「急」を書き足している)。

第2回「“加茂おんな”の日光詣」—叶津口番人往来日記— 関 正平 氏

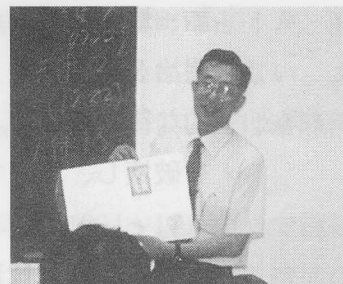
- 女4人とし—16才、17才、18才、18才、右者越後国蒲原郡(嘉永元年～同3年、加茂町之者、日光参詣罷越候由 酉5月20日 安政2年 抜粋)
- 女1人とし—19才、外に添男一人 右者越後国蒲原郡 (叶津番人 作次郎 加茂町之者共、日光参詣罷越候由 寅9月5日 往 来 日 記)

第3回「元禄3年村松藩郷中定書を読む」 佐藤 賢次 氏

- 正保元年(1644)堀直吉の時、下川代替地として村松が与えられ村松藩が成立。
- 村松藩は他藩に比してきつい農民支配をおこない、高い年貢に農民は疲弊。
- 元禄3年2月—全文65か条に及ぶ「郷中定」を制定し、民政全般にわたる藩の基本方針を明らかにした。以後、これが藩の対領民政政策の基本法令となった。

第4回「岳の鉛山文書を読む」その2 長谷川昭一 氏

- 文政3年3月 「鉛山一件村相談欠席詫び証文」
- 天保5年12月 「鉛山飯米代借入証文」
- 年不詳11月 「藩有鉛山飯米預かり覚」
- 安政2年6月 「鉛山共同開鑿断り念書」



第5回「砂押の社倉金返納延期願」 丸山 朝雄 氏

- 慶応2年、鶴森の高木家が借りていた社倉金の返還の取り立てにあって困っていた。そこで、須田の砂押新田百姓総代・組頭・名主ら百姓三役が社倉金返納の延期を新発田の殿様に願い出た。
- 要領の良い独礼であった。

② 歴史講演会

過去に取り上げられなかったテーマのためか、多数の参加者で盛況であった。講師には加茂市史編さんに関して多大のご指導・ご協力を賜っている。参加者 67名

- 日 時 平成16年11月 8 日(土) 午後 2 時～午後 4 時
- 会 場 加茂市民体育館内 公民館 第 4 研修室
- 講 師 加茂市史編集委員 松永 克男 氏
- 演 題 「江戸後期における加茂とその周辺の『悪者』たち」

- 博徒が横行し、加茂山の神社境内や旗本領の下条付近の治安力の薄さについて、縄張り争いが始まる。

- 越後国以外から助っ人として浪人等も加わり、多様化した武器も実際に使われ、各地で激闘が繰り返された。

- 新発田藩の役人と犯罪人の癒着も見られ、目明かしと博徒の二足のわらじをはく者もいた。

- 博徒の戊辰戦争一五泉隊という農兵（博徒）を募り、訓練し官軍と抗戦させたが、状況に依っては後に官軍に寝返ることもあった。（70人余の隊員がいた）



③ 特別歴史講演会

明治元年以降の太政官布告・太政官達等によって神仏区別・神仏分離の政策が推進された。また、神官職制と神社規則の制定が行われ小池内広の活躍と同時に神官として最高の官司となる。講師の迫力ある弁舌に全員引き込まれて終わる。参加者 88名

- 日 時 平成17年 3 月 5 日(土) 午後 2 時～午後 4 時
- 会 場 加茂市文化会館 小ホール
- 講 師 県文化財保護審議委員 新潟大学講師 本間 恂一 氏
- 演 題 「小池内広と神仏分離」

- 天保 3 年加茂町に生まれ、6、7 歳から雛田葵亭に学ぶ。

- 明治元年、大音隆太郎の命を受けて北越諸藩を偵察、加茂に帰り雛田松溪・小柳春堤と共に松田秀次郎の居之隊に参加一地理に明るかったため官軍の案内役となる。

- 明治 3 年 3 月～5 月 寺社取締掛として管内を巡視、廃仏的な行動を取る。弥彦神社の神宮寺に至り、仏像・仏具等を破壊し、現在でも仏像の頂に手斧の痕がある。



鷲尾順敬著「越後弥彦神社神仏分離調査報告」

- 明治 3 年 5 月12日～15日

小池内広が最も活躍した頃で「明治国家の為に」の心意気高く、変更の指導をしている。加茂町の神社全体にわたって指導している。

小池内広著「神社廻見記録」

- 明治政府の神仏分離策を忠実に実行したことで後にその犠牲者ともなったのでは。

- 自分の船「和藤丸」に乗って新潟より帰航中機械に触れ不慮の死を遂げた。46歳。

加茂市の遺跡 平成16年遺跡発掘調査について

加茂市教育委員会社会教育課主査 伊藤 秀 和

本年の遺跡調査は、開業事業に関連した確認調査が2遺跡を対象に行われた。

1. 馬越遺跡—古代・中世—

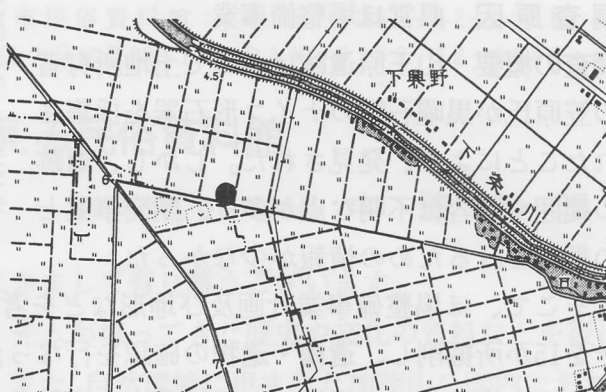
所在地 加茂市大字下条字馬越

調査面積 約54m²

調査期間 平成16年6月9日～6月10日

調査原因 道路建設事業

調査の概要 開発予定地における遺跡の内容を事前に把握することを目的に、調査対象地内に概ね2.0×4.5mのトレンチを6か所掘削し、遺構・遺物の確認を行なった。



馬越遺跡位置図 S = 1 / 25,000

ほぼ全てのトレンチから遺物が少量であるが出土した。遺構は調査面積の制約などもあり、明確でないところもあるが、複数か所で旧河川跡と見られる跡やピットなどの生活痕跡を確認した。出土した土器は平安時代の土師器が主体であることから、古代の集落跡の一部に相当するものと考えられる。馬越遺跡の広がりを示し、今後の事業計画との調整を計る資料が得られた。



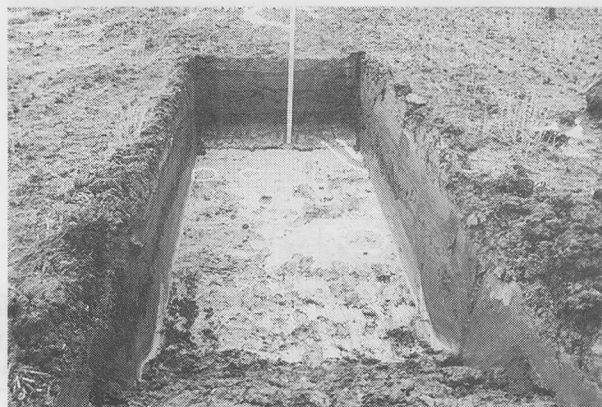
調査地近景



調査風景



1 トレンチ完掘状況



4 トレンチ完掘状況

2. 山王原遺跡—旧石器時代—

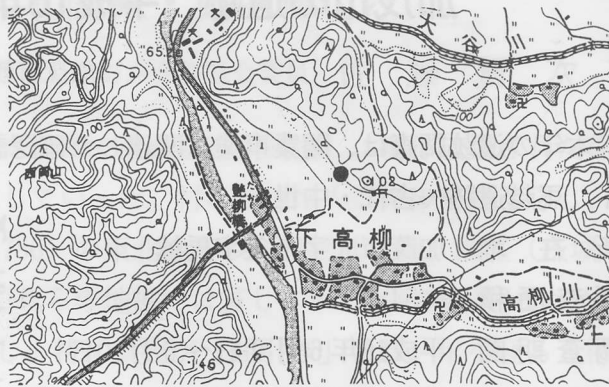
所在地 加茂市大字下高柳字山王原

調査面積 約96m²

調査期間 平成16年10月1日～10月8日

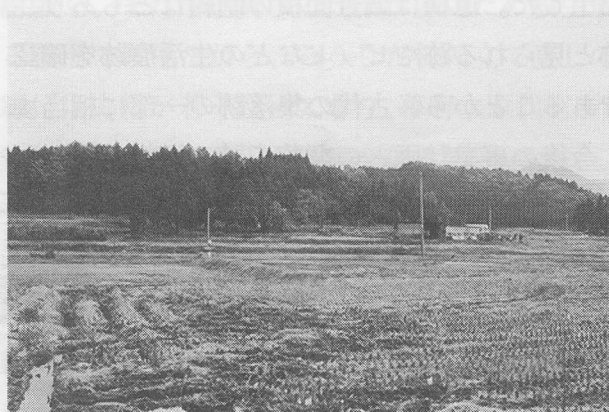
調査原因 県営ほ場整備事業

調査の概要 山王原遺跡はかつて土地所有者の笠原氏が黒曜石製のナイフ形石器を採集されたことにより、発見された。しかし、遺跡の範囲や内容は不明な点が多く、開発事業との調整を計るための情報が少なかった。



山王原遺跡位置図 S = 1 / 25,000

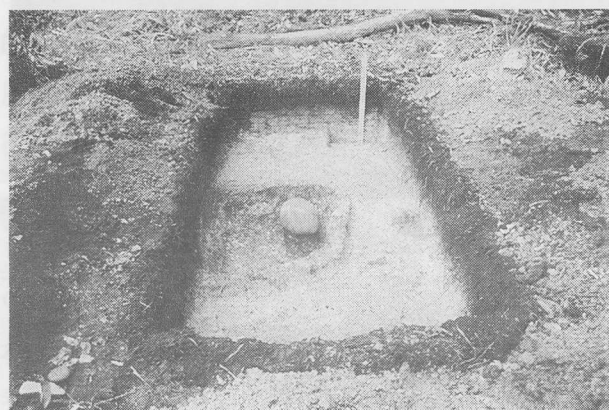
そこで、ほ場整備事業計画及び地形などを考慮し、調査対象地内に概ね2.0×3.5mのトレンチを15か所掘削し、遺構・遺物の確認を行なった。その結果、旧石器時代後期頃と見られる石器を2点検出し、小規模ながら加茂川右岸段丘上に旧石器時代の活動痕跡が明らかとなった。上大谷の丸山遺跡とはほぼ同時期の遺跡と考えられる。



遺跡遠景



調査風景



15トレンチ完掘状況



出土石器

編集後記

平成16年度は台風・水害・地震・豪雪と加茂市民俗資料館周囲も騒がしく過ぎ去ろうとしています。新しい年度に向かって罹災者の力強い復興をお祈りしています。

今年度、第12号発刊に際しては大変ご多忙中にもかかわらず佐藤賢次氏には玉稿を賜り厚く御礼申し上げます。今後一層のご理解・ご協力をお願いする次第です。